つくばね

～地域から世界へ、支援と協力の輪を広げよう～

No.71

発　行：令和6年3月22日
茨城県青年海外協力隊を育てる会
発行人：小川一成
編　集：広報文化委員会
事務局：つくば市高野台3−6　〒305-0074
ＪＩＣＡ筑波センター内
TEL　029(838)1111
印　刷：合資会社おおた

次代を担い未来に羽ばたくラオスの若者たち

会長　小川　一成、副会長　臼井　平八郎、桜川支部長　白田　信夫

私たち3人は令和5年4月30日に日本を出発、翌5月1日にラオスのルアンパバーンに到着しました。ルアンパバーンはラオス北部にある街で、メコン川とナムカーン川の合流地点に位置する古都です。1975年までルアンパバーン王国の王宮が置かれていた街で、市街地全体がユネスコの世界遺産に登録されています。

このルアンパバーンと育てる会は21年前にスタートした高校生の招聘事業を中心に交流を行ってきました。この事業は5年に1度ラオスの高校生15人を日本に招き、ホームステイをしながら

2期生のアロニーは師範学校の先生として
活躍しています

3期生の皆さんです。大学生で頑張っています

朝の托鉢を終えて

この笑顔はどこからくるのだろうか？

文化や教育を体験し、茨城の自然や科学技術に触れるというプログラムです。これまでに3期45人の高校生が来日しました。そして一昨年、4期目の受け入れを計画していましたがコロナ禍のために断念しました。

今回のラオス訪問の一番の目的は、これまで日本に招いた高校生たちがラオスでどのように活躍しているかを知るためでした。

5月1日にルアンパバーン空港に降り立つと、21年前に茨城県に来た1期生の女性2人、チャンマニーさんとボントーンさんが出迎えてくれました。そして1期生10人、2期生13人、3期生13人がラオス全土から駆けつけ、懐かしい笑顔を見せてくれました。さまざまな分野で活躍している彼らの話を聞き、そして職場や家庭にも訪問しました。1期生、2期生はすでに社会人となり日本で体験したこと、感じたことを糧に頑張っています。3期生は大学に進み、将来の夢を描きながら勉学に励んでいます。

「日本の人たちはとても優しかった。ラオスと日本の懸け橋になりたい」とラオスで日本語学校を設立した生徒。茨城で日本のロボットやロケットなどの技術を目の当たりにし、もっと勉強をしてラオスの子供たちに伝えたいと学校の教員になった生徒。日本の建築を見て、素晴らしい建物を造りたいと建築家になった生徒。日本の衛生状態が素晴らしいことに感銘を受けて大学で公衆衛生について教えている生徒。そして米国大使館の通訳や政府機関の職員、公務員、ホテル事業など、さまざまな分野で活躍していました。実際にその職場を見学させていただくことができ、彼ら、彼女らは、生き生きとした笑顔で働き、日本での体験を生かして国造り人づくりに貢献している姿に感動すら覚えました。

今回の訪問のもう一つの目的は、ルアンパバーンのCCC(子供文化センター)所長をつとめ、世界遺産所長として私たちを支えてくれた故ブンコン氏の墓参をすることでした。CCCはラオスの各地に造られており学校教育以外に伝統舞踊や音楽、人形劇や図画工作などを通して情操教育を行っています。育てる会が招いた高校生は、ルアンパバーンのCCCを通して選ばれています。ブンコン氏はCCCの生みの親ともいえる存在で、麻薬や犯罪などのさまざまな危険から子供を守るとともに、情操教育を通して生きる力を身に着けてもらおうと設立され、今ではラオス全土に活動が広がっています。ルアンパバーンのCCCは新しい場所に移転することが決まり、現在、建設が進められていました。

数年ぶりの訪問でルアンパバーンの街も様変わりしていることが感じられました。中国の援助で高速鉄道「中国ラオス鉄道」が走っています。街から30分ほど郊外に出たところに駅舎があり、中国国境からラオスの首都ビエンチャンまで新幹線が走っています。世界文化遺産の街並みには、EV (電気自動車)が走っています。

今回の訪問では、茨城に来た高校生たちが、立派に成長して幅広い分野で羽ばたいている姿に、今までおこなってきた活動の確かな手応えを感じました。そして、一昨年は残念ながら中止せざるを得えなかったラオス高校生の第4期の招聘は、現地のCCCや育てる会の仲間と話し合って近いうちにぜひ再開していきたいと思っています。最後に、忙しい時間を割いて私たちをサポートしていただいた仲間たちに深く感謝をいたします。

2017年2月訪問時のブンコンさんと子どもたち

2017年2月訪問時のCCC

ラオスとの出会い

27年前、茨城県青年海外協力隊を育てる会が発足しました。青年海外協力隊は1965年、フィリピン、マレーシア、カンボジア、ラオスに第一陣を派遣。当育てる会では1999年第一陣が派遣されたCCCのあるラオスを訪問しました。その時に出会ったのは、オランダからNGOで派遣された原田悦子さんでした。守谷市出身でオランダ人と結婚。その女性と話す中で『父の遺産でラオスの子供たちを日本に派遣したい』という申し出を受けました。この申し入れをきっかけに5年に一度、ラオスの高校生を育てる会がホームステイなどで受け入れる事業がスタートしました。

息の長い付き合いをしたいという考えで現在もラオスとの交流が続いています

隊員からの便り

派遣中の大橋美月隊員からベナン便り第2報が届きました

2022年度1次隊／ベナン共和国／野菜栽培　大橋　美月

今回はベナンで感じた心温まった日本文化のエピソードを書こうと思います。

私は今住んでいるグランポポ村が大好きですが、村にはテレビやスマホを持てず小学校までしか行けない生活レベルの家庭が少なくありません。もちろん日本の国名を知ってる人は稀です。

しかしここで驚いたことがありました。ドラゴンボールやナルトなどの日本のアニメの絵を描く子がいたり、さらに空手を知っている人が半数近くもいたことです。

テレビもないのに何で知ったのかと尋ねると「何となく知ってる」とハッキリとした答えは返ってきません。

しかし15年近く空手をやっていた私は少し嬉しく思い、試しに空手の技を見せてみたところ意外にも大いに喜ばれ、いつの間にか20人以上の人集りになっていました。
その後片道1時間の所に道場があることを知ったので興味本位で足を運ぶようになります。

「日本空手協会 ベナン支部」として認定された日

その空手道場には三段を持つベナン人先生と生徒に黒帯さんもいました。先生は子どもたちにボランティアとして無償で空手を教えており、なんと生徒は50人以上もいます。

先生は空手を通した子どもたちへの教育と文化理解に熱心でした。“道場訓”を練習後に皆で正座して唱えた時は、幼い頃の水戸の道場での風景を思い出し、嬉しさと驚きと懐かしさが込み上げてきました。そこでは技術以外にも礼儀や掃除の大切さなど心·技·体を大切にしていました。

先生はこれらを伝えるために道場を開くに至ったそうで、SNSでも生徒たちの楽しそうに励む写真を添えてよく発信しています。それもあり新しい生徒が少しずつ増えており、私はその真っ直ぐな心に感銘を受け、今では毎週のように練習に参加しています。他の協力隊員も白帯を締めて通うようになりました。

この先生が空手を始めたきっかけは驚いたことに昔青年海外協力隊としてベナンに派遣された隊員に空手を教えてもらったことだそうです。昨年、日本空手協会の正式な道場の一つとして認定を受けるまでにもなりました。昔誰かがまいた種がこうして繋がれ、今でも生きている事に感動しました。

この事から、ベナンの村で日本文化や空手の認知度が高かった理由は以前日本人が楽しく教えてくれていたり、テレビやSNSで見かけた人が広めていったからだと実感しました。来月からは先生と共に私のいるグランポポ村でも一緒に道場を開くことになりました。

私に残された任期は5ヶ月間ですが、精一杯この大好きな村と道場の人たちの誰かにとって希望の種を撒けるよう精進していこうと思います。

以上、ベナンからのレポートとさせて頂きます。

水戸市とJICAのパンフレットで
日本の文化を伝えました

お祭りで伝統的なダンスを
子どもたちに教えてもらいました

同じ任地の小学校教育隊員と農家仲間
2人は心強いパートナーです

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所を訪問して

副会長　臼井　平八郎

新型コロナウイルスの世界的感染拡大によって世界中に派遣されていた青年海外協力隊の隊員が全員帰国せざるを得ない事態に遭遇しました。それまでは常時2000人の隊員を派遣していました。そしてコロナ禍が少しずつ収まる中で隊員の派遣も復活し、現在は約800人の隊員が派遣されています。しかし、コロナ禍以前の状態に戻るまでには多くの課題が残されています。そうした中、全国で2か所設けられた訓練所の1つ、長野県駒ケ根市の駒ケ根青年海外協力隊訓練所を11月1日に訪問しました。

この訓練所は、1979年に全国で初めての訓練所として開設されました。日本アルプスを臨む風光明媚な場所に建てられ、これまでに約21300人の隊員を訓練し、世界に派遣してきました。この訓練所を支えてきた地元の駒ケ根協力隊を育てる会（池崎保会長）は物心両面で隊員や訓練所を支援し、2023年度の外務大臣表彰を受けました。

筆者・訓練所前で

訓練所正面玄関

育てる会では、国際交流イベント「みなこいワールドフェスタ」で料理などを通じ国際交流を進め、訓練所への中学生体験入隊で隊員のすそ野を広げ、隊員経験者が帰国してからの活躍の場を提供するなど幅広い活動を行っています。

訓練所を案内していただいた訓練所の宍戸あゆみさんは、2018年度4次隊でネパールに環境教育活動の協力で派遣されていましたがコロナ禍で帰国を余儀なくされ、現在は訓練所のボランティア理解促進の役割を担ってPR活動を行っています。訓練所には訪問当時、20～40代の若者約80人が訓練を受けていました。宍戸さんから、協力隊の活動を通し自らの貴重な体験を聞くことができました。そして、この訓練所の役割やもっと大勢の若者が世界で羽ばたくため、協力隊の意義ややりがいなどについてもお話していただきました。

ウクライナとロシア、イスラエルとハマスなど世界中で戦争や紛争が起きています。日本が世界に果たす役割も問いかけられようとしています。そうした中、多くの若者が世界に羽ばたき、さまざまな活動を通して世界観を養っていくことは非常に大切なことと思っています。こうした観点に立ち、改めて青年海外協力隊の活動と隊員を支える育てる会の役割について認識を深めました。

2023年度3次隊表敬訪問を終えて

茨城県青年海外協力隊OV会　副会長
平成２年度３次隊／モロッコ／測量　大橋　暁

これまで前任していた会長から副会長になり、もう表敬訪問同行の要請はないだろうと思いつつ、今回の2024年3次隊への同行要請を受けて参加することになったのだが、候補生として派遣前訓練に参加しそれを無事終えて、これから赴任地へ向かう新規隊員の顔はどの隊次であっても晴々しく、希望に満ちており、そんな彼らを見ているだけで元気になれる。

自己紹介する塚本 早紀隊員

任国の国旗をもって、右端筆者

今次隊はスリランカ自動車整備の舘　雅実さん、東ティモール小学校教育の紙田 笑夢さん、そしてモロッコPCインストラクターの塚本 早紀さんの3人であった。

たまたまかもしれないが、この3人の派遣国はどれも私にとって少なからず関わり合いのある国である。

まずモロッコは私自身が測量隊員として32年前に赴任していた国であり、スリランカは同期隊員の元妻が日本語教師として派遣されていた国であり、東ティモールは短期専門家として派遣されていたインドネシアから2002年に分離独立した国である。

今回は副知事との接見であったが多い時で10人を超える時

和やかに談笑

記念品を受ける紙田　笑夢隊員

親善大使の委嘱状を受ける舘 雅実隊員

もあったので3人という少人数だったせいか、これまで私が同行してきた時と比べて場が和やかで、新規隊員の方々も心なしか緊張する様な場面はなかったように見える。

育てる会の小川会長に導かれて会食をした際の会話でも、3人とも既に海外渡航経験があり私の派遣された時代とは大きく変わっているのだなと今更ながら感じさせられた。

しかし、今回は単なる海外旅行とは一線を画す、国の事業で行う専門知識を伴った国際協力ボランティアである。

私自身、派遣前訓練中にはこれまで聞いたことのない派遣国の情報や語学研修、度重なる予防接種や非常時の対応など、いやがおうにも赴任後の期待を膨らませることばかりで、任地に着いたらどうなるものかと心配することも全くなく、フライング寸前のスタンディングポジション態勢であった。

しかしながらいざ赴任されて現地の職場に行くと、しようと思っていたことが何一つ出来ない。
モロッコの同僚たちの働き方が余りにもバブル期の日本と違っていて空回りの連続であった。

それも半年もすると現地に慣れ過ぎてしまい勤勉な日本人らしさを失ってしまったのかと思うほど溶け込んでしまった。

多種多様な職種や派遣国で違いはあるが、この感覚は多くの協力隊経験者が経験することである。

グローバル化などという言葉を聞くことがなかった32年前とは大きく変化しているのだろうが、協力隊の良いところは専門技術が仮に足りなかったとしても現地の方との触れ合いの中で双方の国を知る事が出来るということである。

インバウンドによって外国人との関わり合いは国内であってもかなり深くなってはきているが、2年間という長期にわたってその国に溶け込み、空回りしながらでもがむしゃらに彼らと共に何かを遂げた経験は必ず本人にとってかけがえのない経験になる事だろう。

一回りも二回りも大きくなって無事帰って来てくれることを願って止まない。

壮行会も行いました

知事表敬訪問からJICA筑波に戻り、恒例の育てる会主催の壮行会をおこないました。

臼井副会長の主催者挨拶、JICA筑波の高橋　亮　新所長他の挨拶から始まり、和やかに一時間を過ごしました。今回は海外からの研修員の参加が無く比較的静かな送る会となりました。
各隊員に「職種以外で是非ともやってみたいことは何ですか?」といつものインタビューには右の様に回答していただきました。

舘 雅実　隊員　スリランカ　自動車整備
現地のチームに入ったり子供を集めてチームを作ったりしてサッカーをやりたい。その為に用具を持っていく予定

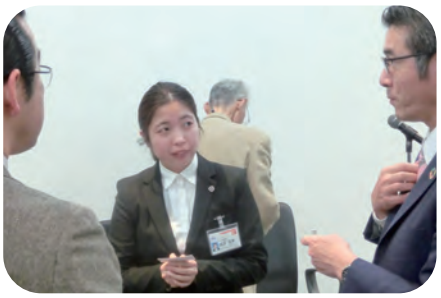
紙田 笑夢　隊員　東ティモール　小学校教育
東ティモールは小さな国なので全国各地を巡って色々なものを見たい。地域によって文化や使われている言語が異なるので、調べてみたい

塚本 早紀　隊員　モロッコ　PCインストラクター
茨城の「干し芋」を持って行って現地の人に食べてもらい感想を聞きたい。もし気に入ってもらえるようなら現地でも干し芋つくりをして茨城をアピールしてみたい

副会長挨拶

参加者全員で

懇談の様子①


懇談の様子②

懇談の様子③

これまで・これからの事業について

■ これまでの事業報告　[令和5年12月～令和6年3月]

令和5年	12月 2 日(土)	第9回運営委員会	JICA筑波センター
令和6年	1 月 6 日(土)	第10回運営委員会	JICA筑波センター
	1 月12日(金)	3次隊3名 県知事表敬訪問・壮行会	県庁・JICA筑波センター
	1 月23日(火)	(一社)協力隊を育てる会　新春の集い	東京
	2 月 3 日(土)	第11回運営委員会	(中止)
	3 月 2 日(土)	第12回運営委員会	(中止)
	3 月22日(金)	広報紙「つくばね」　71号発行	

■ これからの事業予定　[令和6年4月～6月]

令和6年	4 月 6 日(土)	令和6年度第1回運営委員会	JICA筑波センター
	4 月12日(金)	4次隊 県知事表敬訪問・壮行会	県庁・JICA筑波センター
	5 月 4 日(土)	第2回運営委員会	JICA筑波センター
	5 月	令和6年度第1回理事会	JICA筑波センター
	6 月	令和6年度通常総会	JICA筑波センター

事務局からのお願い

令和5年度会費未納の方へ
年度末になりましたので、未納の方は下記まで納入下さるようお願い申し上げます。
指定口座　常陽銀行研究学園都市支店
普通預金　店番104　NO 1411153
口座名　茨城県青年海外協力隊を育てる会　会長　小川　一成

事務局だより

会員状況　( ) は家族会員

区 分	令和5年10月末現在	令和6年3月末現在
個 人	65 (2)	65 (2)
団 体	18	18
計	83 (2)	83 (2)

編集後記

今年は年明け早々に悲しいことが続いています。
会員の皆様も悲しい思いをされているのではないでしょうか。
それでも、派遣中の協力隊員は現地で地道に活動を続けており、更には新たに希望をもって赴任されています。彼らの現地での安全や健康を祈らずにいられません。
育てる会としてもできるだけの応援をしていきたいものです。